

商店建築

SHOTENKENCHIKU MONTHLY MAGAZINE OF STORE DESIGN / INTERIOR ARCHITECTURE 2023 Vol.68 No.03

3
2023

連続企画

先の読めない時代に求められる設計手法 vol.1

天井&ファブリック

特集

アートが空間を変える

Feature Article

焼き肉&鉄板焼き店



Interview

天井造作で感情や行動を喚起する “光の状態”をつくる

落合守征デザインプロジェクト 落合守征

ダイナミックな天井デザインで、国内外のアワードを受賞するなど評価を得てきた落合守征さんは、「天井は表現の自由度が高く、空間のメッセージを発信するのに最適な場」と語る。その一方、マテリアルの選定、デザインや施工のシミュレーション、現場での調整など、壁や床以上に手数が掛かりリスクの高い場所でもある。その困難をどのように克服し、思い描く空間を実現しているのか。10年以上にわたり積み上げてきたノウハウを公開してもらった。

取材・文／塩野哲也 ポートレート撮影／堀口安明

機能にとらわれない
心地良さとメッセージを
天井で表現する

天井は、さまざまな機能を求められる壁に比べてデザインの自由度が高く、用途や間取りの変更があっても、そのまま残される可能性が高い。そのためプロジェクトを統合するような力が天井にはあり、空間のコンセプトや企業

のメッセージを表現する場になり得る。

落合さんが掲げるこうした思いの根底にあるのは、空間に対する考え方である。「太古の昔、人々は大自然の中で、祈りや集いといった行為にふさわしい場を選び、そこに教会や城を建てていきました。私はその根源に返るような空間を創造したいと思っています。近年は、美容室、飲食、物販といった業種を元に店舗がつくられています。本来はまず人々が集う心地良い空



おちあい・もりゆき

1973年東京都生まれ。早稲田大学大学院理工学研究科建築学専攻修士過程修了後、2003年に落合守征デザインプロジェクトを設立。建築や空間、プロダクトのデザインの他、ブランドデザインなど多様なデザイン活動を展開する。最近の仕事に「Excellent City Aobadai II The Park」(2022年)や「LHM kindergarten」(19年4月号)、「SPEA 向ヶ丘遊園店」(19年2月号)など。

間があるべきです。また、最近は機能から導かれるデザインが増え、壁や家具には空間の用途に合った役割や形が求められます。その中で天井は機能から自由になりやすく、空間本来の魅力を表現できる場と考えています」と落合さん。

天井のアルミシートで水の流れを表現

「ARKHE beauty salon」(2011年)は、落合さんが天井のデザインに注力するきっかけとなったプロジェクトである。天井にうねるように連なるアルミシートは、空間のダイナミズムを感じさせ、iF DESIGN AWARD金賞(ドイツ)など、複数の賞を受賞した。落合さんは当時をこう振り返る。

「ARKHEは『水』をテーマにした美容室です。“水”や“なめらかな素髪の美しさ”を表現する素材としてアルミシートに着目しました。天井の高さを生かした流れるような造形は、一枚の長い布で仕立てる着物のつくり方から着想し、一筆書きのようにアルミシートを折り曲げています。思い通りの曲面をつくるため、適した材料がないかメーカーに片っ端から電話しました。現場でも何度もやり直し、本当に形になるかは最後まで不安でした」

アルミシートは厚さ0.4mm、幅40cm、長さ300mのロール状のものを無塗装のまま使っている。施工は天井工事に慣れている電気設備の職人が担当。シートを吊るための金具は薄いシートが裂けないようさまざまな金物を検証して探し出し、フック状の全ネジを天井に固定してシートに穴を開けて吊っている。デザインの決定までに、50分の1模型、10分の1模型、5分の1模型、原寸模型とスケールを徐々に大きくしながら、どのポイントで吊れば美しい形



ARKHE beauty salon
(2011年)

厚さ0.4mmのアルミシートが曲面を描きながら連続する。「水」をテーマにした美容室で、水やなめらかな髪の流れを表現した(撮影／ナカサ&パートナーズ)

Interview

天井造作で感情や行動を喚起する “光の状態”をつくる

落合守征デザインプロジェクト 落合守征

ダイナミックな天井デザインで、国内外のアワードを受賞するなど評価を得てきた落合守征さんは、「天井は表現の自由度が高く、空間のメッセージを発信するのに最適な場」と語る。その一方、マテリアルの選定、デザインや施工のシミュレーション、現場での調整など、壁や床以上に手数が掛かりリスクの高い場所でもある。その困難をどのように克服し、思い描く空間を実現しているのか。10年以上にわたり積み上げてきたノウハウを公開してもらった。

取材・文／塩野哲也 ポートレート撮影／堀口宏明

機能にとらわれない
心地良さとメッセージを
天井で表現する

天井は、さまざまな機能を求められる壁に比べてデザインの自由度が高く、用途や間取りの変更があっても、そのまま残される可能性が高い。そのためプロジェクトを統合するような力が天井にはあり、空間のコンセプトや企業

のメッセージを表現する場になり得る。落合さんが掲げるこうした思いの根拠は、空間に対する考え方である。人々は大自然の中で、祈りや集いとにふさわしい場を選び、そこに教会を建てていきました。私はその根源に返ることを創造したいと思っています。近年、飲食、物販といった業種を元に店舗が増えていますが、本来はまず人々が集う



おちあい・もりゆき
1973年東京都生まれ。早稲田大学大学院理工学研究科建築学専攻修士過程修了後、2003年に落合守征デザインプロジェクトを設立。建築や空間、プロダクトのデザインその他、ブランドデザインなど多様なデザイン活動を展開する。最近の仕事に「Excellent City Aobadai II The Park」(2022年)や「LHM kindergarten」(19年4月号)、「SPEA 向ヶ丘遊園店」(19年2月号)など。



Dream Dairy Farm Restaurant
2種類の大きさの格子を立体的に組み合わせた天井構造。リカーボネート板を張った天井構造。リカーボネート板から柔らかな光が漏れ出す。

間があるべきです。また、最近は機能から導かれるデザインが増え、壁や家具には空間の用途に合った役割や形が求められます。その中で天井は機能から自由になりやすく、空間本来の魅力を表現できる場と考えています」と落合さん。

天井のアルミシートで水の流れを表現

「ARKHE beauty salon」(2011年)は、落合さんが天井のデザインに注力するきっかけとなったプロジェクトである。天井にうねるように連なるアルミシートは、空間のダイナミズムを感じさせる。IDE DESIGN AWARD金賞(ドイツ)など、落合さんは当時をこう振り返る。

が出るか検討を重ね、細かな調整が多くなり、指示を出し、との兼ね合い、イトとアルミ、がら、光の、ルする織、

「光は、光の、ちろ、きる、と、



Dream Dairy Farm Restaurant (2014年)

2種類の大きさの格子を立体的に組み、半透明の中空ポリカーボネート板を張った天井造作の近景。中空ポリカーボネート板から柔らかな光が漏れる (撮影/落合守征)



Dream Dairy Farm Store (2013年)

層をつくるように吊った天井の中空ポリカーボネート板が光を受けて白く発光する牧場の直営ショップ。販売する商品の原料であるミルクや牧場の風景を想起させることを意図した (撮影/ナカサ&パートナーズ)

が出るか検討を重ねていたものの、現場での細かな調整が多く、落合さんは職人に付きっきりで指示を出し続けた。特に注意したのは照明との兼ね合いだ。天井に取り付けたスポットライトとアルミシートの位置や距離を調整しながら、光の反射や室内への光の出方をコントロールする緻密な作業を繰り返した。

「光は特に重要です。天井の素材や形以上に「光の状態」を大切にしたいと考えています。もちろん空間に必要な照度も求められますが、できるだけ機能照明を使わずに光と造作を一体として成り立たせるため、外光との兼ね合いも確認します。天井の施工期間が長くなり予算がかかるので、クライアントの理解は不可欠ですね。天井によって、今まで見たこともない方法で理念や思いをダイレクトに伝え、感情を喚起する可能性に満ちた場所にしよう」と提案しています」

最初に天井のデザインを決め、そこから平面計画を導き、壁・床を決めていくというデザインプロセスを採ることもあるそうだ。

天井によって変化する空間の中で「自分の場所」を見つけてもらう

森に囲まれた牧場の倉庫をリノベーションしたレストラン「Dream Dairy Farm Restaurant」(2014年)では、天井に白い木材の格子と中空ポリカーボネート板を組み合わせ、木々が茂る森のような空間を表現した。落合さんは日頃かえらさまざまな素材を取り寄せ、天井材として使えるかどうかを検証している。

「天井に使うマテリアルは、万一落下しても事故を起こさないため、また上向きに取り付けやすいよう軽さが重要です。更に、現場でサイズを微調整するため、カッターで切れる加工性

もポイントになります。このレストランでは、牛舎の屋根にも使われている中空ポリカーボネート板を採用しました。レストランをつくるというよりも、「食事がしたくなる心地良い空間」をつくることを意識していて、森の木漏れ日を感じる天井からの光が感情を刺激し、行動を喚起することを目指しました。その意味でこの天井は自然の空や森に近いものだと思います」

一方、牧場の直営ショップ「Dream Dairy Farm Store」(2013年)では、天井に透明な中空ポリカーボネート板を連続させ、空間全体を白いミルクのような光で満たした。壁は牧場を思わせる緑色のグラデーションに塗装しており、天井のアルミ造形が壁の色を反射してミルク色の光と絡み合うことで、霧をイメージさせる淡い情景が生まれる。「日本は霧や雨が多くの、その景色を短歌や俳句に詠んできました。霧と共に意識が拡張し、自然や環境と一体に



Daruma International Nursery (2020年)

天井に貼ったミラーが、季節や一日の自然光の変化を映し出し、反射した像が伸びやかに広がる (撮影/荒木文雄)



Dream Dairy Farm Store (2013年)

層をつくるように吊った天井の中空ポリカーボネート板が光を受けて白く発光する牧場の直営ショップ。販売する商品の原料であるミルクや牧場の風景を想起させることを意図した(撮影/ナカサ&パートナーズ)

最初に天井のデザインを決め、そこから平面計画を導き、壁・床を決めていくというデザインプロセスを採ることもあるそうだ。

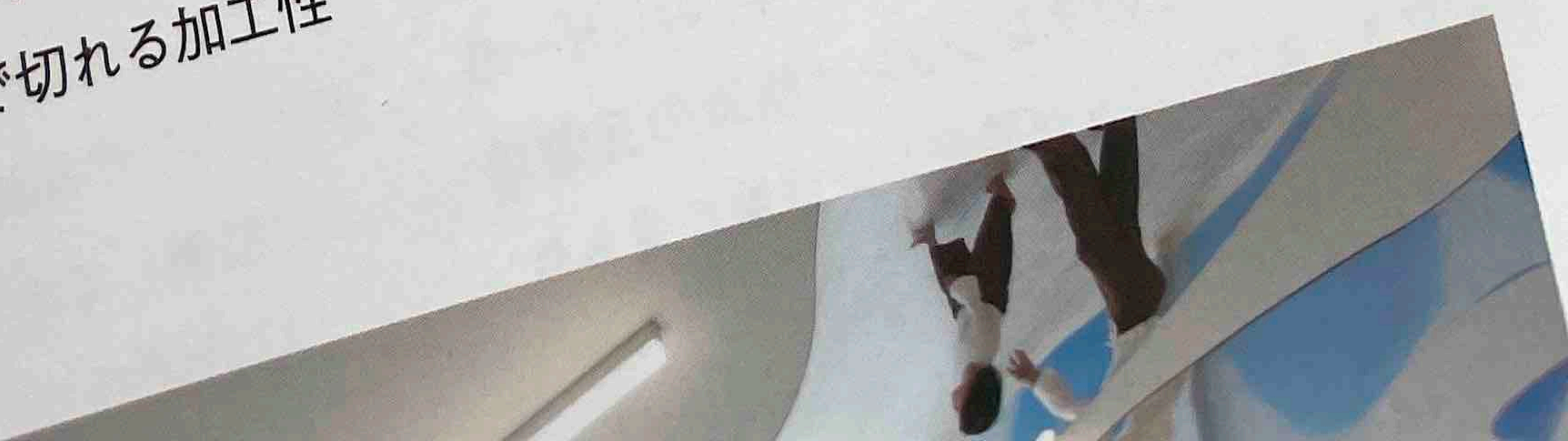
天井によって変化する空間の中で「自分の場所」を見つけてもらう

森に囲まれた牧場の倉庫をリノベーションしたレストラン「Dream Dairy Farm Restaurant」(2014年)では、天井に白い木材の格子と中空ポリカーボネート板を組み合わせ、木々が茂る森のような空間を表現した。落合さんは日頃からさまざまな素材を取り寄せ、天井材として使えるかどうかを検証している。

「天井に使うマテリアルは、万一落下しても事故を起こさないため、また上向きに取り付けやすいよう軽さが重要です。更に、現場でサイズを微調整するため、カッターで切れる加工性

もポイントになります。このレストランでは、牛舎の屋根にも使われている中空ポリカーボネート板を採用しました。レストランをつくるというよりも、“食事がしたくなる心地良い空間”をつくることを意識していて、森の木漏れ日をおぼせる天井からの光が感情を刺激し、行動を喚起することを目指しました。その意味でこの天井は自然の空や森に近いものだと思います」

一方、牧場の直営ショップ「Dream Dairy Farm Store」(2013年)では、天井に透明な中空ポリカーボネート板を連続させ、空間全体を白いミルクのような光で満たした。壁は牧場をおぼせる緑色のグラデーションに塗装しておき、天井のアルミ造形が壁の色を反射してミルク色の光と絡み合うことで、霧をイメージさせる淡い情景が生まれる。「日本は霧や雨が多く、その景色を短歌や俳句に詠んできました。霧と共に意識が拡張し、自然や環境と一体に



現場での
に付きっき
たのは照明
スポットラ
を調整しな
をコントロー

や形以上に
ています。も
れませんが、で
造作を一体
兼ね合いも
くなり予算
解は不可欠
たこともない
に伝え、感情
にしましょう

最初に天井のデザインを決め、そこから平面計画を導き、壁・床を決めていくというデザインプロセスを採ることもあるそうだ。

天井によって変化する空間の中で「自分の場所」を見つけてもらう

森に囲まれた牧場の倉庫をリノベーションしたレストラン「Dream Dairy Farm Restaurant」(2014年)では、天井に白い木材の格子と中空ポリカーボネート板を組み合わせ、木々が茂る森のような空間を表現した。落合さんは日頃からさまざまな素材を取り寄せ、天井材として使えるかどうかを検証している。

「天井に使うマテリアルは、万一落下しても事故を起こさないため、また上向きに取り付けやすいよう軽さが重要です。更に、現場でサイズを微調整するため、カッターで切れる加工性

もポイントになります。このレストランでは、牛舎の屋根にも使われている中空ポリカーボネート板を採用しました。レストランをつくるというよりも、「食事がしたくなる心地良い空間」をつくることを意識していて、森の木漏れ日をつくることを意識して、森の木漏れ日を思わせる天井からの光が感情を刺激し、行動を喚起することを目指しました。その意味でこの天井は自然の空や森に近いものだと思います」

一方、牧場の直営ショップ「Dream Dairy Farm Store」(2013年)では、天井に透明な中空ポリカーボネート板を連続させ、空間全体を白いミルクのような光で満たした。壁は牧場を思わせる緑色のグラデーションに塗装しており、天井のアルミ造形が壁の色を反射してミルク色の光と絡み合うことで、霧をイメージさせる淡い情景が生まれる。「日本は霧や雨が多く、その景色を短歌や俳句に詠んできました。霧と共に意識が拡張し、自然や環境と一体に



Daruma International Nursery (2020年)

天井に貼ったミラーが、季節や一日の自然光の変化を映し出し、反射した像が伸びやかに広がる(撮影/荒本文雄)



Excellent City Aobadai II
The Park (2022年)
天井と壁全体に多角形の穴を開けた集合住宅のロビー。天井の穴には水流をイメージしたアルミ造作や、地層の質感を表現したアクリル系樹脂のレリーフを設えており、マテリアルを介して多様な光が落ちる (撮影／荒木文雄)

なるような感覚が空間づくりには大切だと考えています」と落合さん。

保育所「Daruma International Nursery」(2020年)では、天井に取り付けた鏡に壁の模様や外の景色が映り込み、動き回ると顔が映ったり外光が反射したりと景色が変わっていく。遊具や玩具で遊ぶだけではなく、空間の中で自分が心地良い場所を探す力を身に付け、創意工夫して楽しみを見つけてほしいという願いが込められている。

ヒューマンスケールな手仕事が
近代的な素材に温かみを添える

「積み上げてきた天井技法の集大成」と落合さんが話すのは、集合住宅「Excellent City Aobadai II The Park」(2022年)のロビーのデザインだ。このマンションは横浜の丘陵地に立ち、周辺には丘が隆起した地層が見られ、

先史時代から人々の暮らしを支えてきた清らかな水が湧き出ている。そうした歴史をロビーで美術館のように表現するため、光が降り注ぐような多角形の穴を天井に開けアルミシートで水の流れを表現した他、特殊なアクリル系樹脂を使ったレリーフで地層の質感をつくり上げた。レリーフのテクスチャーは落合さん自身が特殊塗装のペインターと協働しながら、アート作品として制作している。「マテリアルを組み合わせる際のポイントは、反射光や陰影がどう複合していくかを探ること」と落合さん。光源から出た光が、多様な質感のマテリアルに反射・透過しレイヤー状に重なり合うことで、どのような状態を生み出すかを模型やモックアップで検証している。

マンション全体の工事はゼネコンが行う中、ロビーの天井施工については落合さんがこれまで協働してきた職人を集めてチームを組んだ。「設計図通りにはいかないからこそ、面白い

ものづくりができます。アイデアは色々出ますが、それをどのように実現するかが重要です。こうした天井のデザインが海外で評価されるのは、着物や折り紙などの日本のものづくりを意識したデザイン手法、つまり一枚の布のようなアルミシートからまったく想像のできない形をつくっていく、そうした日本の美意識や精神性を感ぜられるからだと思います。和紙や漆など日本的な素材ばかりでなく、欧米の文化にも敬意を表して世界中に流通しているマテリアルも使いながら、日本の風土や文化、ものづくり由来するモノをつくりたい。そして、相互の文化を掛け合わせるような新しい文化価値を持ったデザインを発信していきたいですね」

アルミや樹脂、鏡など無機質な素材を使いながら、職人によるヒューマンスケールな手仕事が空間に温かみを与える。こうした天井が、今では落合さんが手掛ける空間の象徴になっている。

(了)



左／アルミ造作の施工風景。ARKHE beauty salonのころから、成栄電設の岡本康治さんが担当している
落合さんが自ら施工。絵画や彫刻作品としての展開も見据えている (3点画像提供／落合守征)

中、右／アクリル系樹脂のレリーフは、特殊塗装のペインターと協働して



Excellent City Aobadai II
The Park (2022年)

天井と壁全体に多角形の穴を開けた集合住宅のロビー。天井の穴には水流をイメージしたアルミ造作や、地層の質感を表現したアクリル系樹脂のレリーフを設えており、マテリアルを介して多様な光が落ちる(撮影/荒木文雄)

るような感覚が空間づくりには大切だと考
います」と落合さん。

所「Daruma International Nursery」
(主)では、天井に取り付けた鏡に壁の模
景色が映り込み、動き回ると顔が映っ
反射したりと景色が変わっていく。
遊ぶだけではなく、空間の中で
場所を探す力を身に着け、創
みを見つけてほしいという願
る。

しな手仕事
かみを添える

技法の集大成」と落
「Excellent

先史時代から人々の暮らしを支えてきた清ら
かな水が湧き出ている。そうした歴史をロビー
で美術館のように表現するため、光が降り注
ぐような多角形の穴を天井に開けアルミシー
トで水の流れを表現した他、特殊なアクリル
系樹脂を使ったレリーフで地層の質感をつく
り上げた。レリーフのテクスチャーは落合さん
自身が特殊塗装のペインターと協働しながら、
アート作品として制作している。「マテリアル
を組み合わせる際のポイントは、反射光や陰
影がどう複合していくかを探ること」と落合さ
ん。光源から出た光が、多様な質感のマテリア
ルに反射・透過しレイヤー状に重なり合うこと
で、どのような状態を生み出すか

ものづくりができます。アイデアは色々出ますが、
それをどのように実現するかが重要です。こう
した天井のデザインが海外で評価されるのは、
着物や折り紙などの日本のものづくりを意識
したデザイン手法、つまり一枚の布のようなア
ルミシートからまったく想像のできない形をつ
くっていく、そうした日本の美意識や精神性を
感じられるからだと思います。和紙や漆など日
本的な素材ばかりでなく、欧米の文化にも敬
意を表して世界中に流通しているマテリアル
も使いながら、日本の風土や文化、ものづく
りに由来するモノを

と考
ery」
の模
決つ
く。
で
創
頭

先史時代から人々の暮らしを支えてきた清らかな水が湧き出ている。そうした歴史をロビーで美術館のように表現するため、光が降り注ぐような多角形の穴を天井に開けアルミシートで水の流れを表現した他、特殊なアクリル系樹脂を使ったレリーフで地層の質感をつくり上げた。レリーフのテクスチャーは落合さん自身が特殊塗装のペインターと協働しながら、アート作品として制作している。「マテリアルを組み合わせる際のポイントは、反射光や陰影がどう複合していくかを探ること」と落合さん。光源から出た光が、多様な質感のマテリアルに反射・透過しレイヤー状に重なり合うことで、どのような状態を生み出すかを模型やモックアップで検証している。

マンション全体の工事はゼネコンが行う中、ロビーの天井施工については落合さんがこれまで協働してきた職人を集めてチームを組んだ。「設計図通りにはいかないからこそ、面白い

ものづくりは色々出てくる。それをどのように実現するかが重要です。こうした天井のデザインが海外で評価されるのは、着物や折り紙などの日本のものづくりの伝統的なデザイン手法、つまり一枚の布のようなくっついていく、そうした日本の美意識や精神性を感じられるからだと思います。和紙や漆など日本的な素材ばかりでなく、欧米の文化にも敬意を表して世界中に流通しているマテリアルも使いながら、日本の風土や文化、ものづくりに由来するモノをつくりたい。そして、相互の文化を掛け合わせるような新しい文化価値を持ったデザインを発信していきたいですね」

アルミや樹脂、鏡など無機質な素材を使いながら、職人によるヒューマンスケールな手仕事で空間に温かみを与える。こうした天井が、今では落合さんが手掛ける空間の象徴になっている。

雲形の
カウン

まー

Bar M
Design

東京
設計
施工
担当



成栄電設の岡本康治さんが担当している 中、右／アクリル系樹脂のレリーフは、特殊塗装のペインターと協働して
いる(3点画像提供／落合守征)

「あんな感覚が空間づくりには大切だと考えています」と落合さん。

保育所「Daruma International Nursery」(2020年)では、天井に取り付けた鏡に壁の模様や外の景色が映り込み、動き回ると顔が映ったり外光が反射したりと景色が変わっていく。遊具や玩具で遊ぶだけではなく、空間の中で自分が心地良い場所を探す力を身に着け、創意工夫して楽しみを見つけてほしいという願いが込められている。

ヒューマンスケールな手仕事
近代的な素材に温かみを添える

「積み上げてきた天井技法の集大成」と落合さんが話すのは、集合住宅「Excellent City Aobadai II The Park」(2022年)のロビーのデザインだ。このマンションは横浜の丘陵地に立ち、周辺には丘が隆起した地層が見られ、

先史時代から人々の暮らしを支えてきた水が湧き出ている。そうした自然の恵みを美術館のように表現するために、多角形の穴を天井に開け、トで水の流れを表現した他、特殊な樹脂を使ったレリーフで地層を再現し上げた。レリーフのテクスチャーは、自身が特殊塗装のペインターと協力して制作している。作品として制作しているだけでなく、影がどう複合していくかを探ることも行っている。光源から出た光が、多様な素材に反射・透過しレイヤー状に重なり、どのような状態を生み出すかをシミュレーションで検証している。

マンション全体の工事はゼネコンが担当し、ロビーの天井施工については落合さんと協力してきた職人を集めて、設計図通りにはいかないから、



左／アルミ造作の施工風景。ARKHE beauty salonのころから、成栄電設の岡本康治さんが担当して落合さんが自ら施工。絵画や彫刻作品としての展開も見据えている(3点画像提供／落合守征)